東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2006年7月28日

（めすの）蜘蛛の家

アッラーを差し置いて外の主人を取る者を譬えれば、（自分で自分の）家を造る（めすの）蜘蛛のようなものである。本当に家の中でも最も弱いのは、（めすの）蜘蛛の家である。」（蜘蛛章第４１節）

本日のホトバでは、この節の解釈を行なっていきましょう。この句で用いられている「アンンカブート」とは、めすの蜘蛛を意味します。この節で見られる動詞の活用形からも、それが読み取れます。

蜘蛛に関して行なわれてきた観察や研究では、非常に興味深いことが判明してきています。これらは、クルアーンが、最も弱い《信頼できない》家をめすの蜘蛛の家、と特に定義した理由をも示しています。生物は、多くのケースにおいておすがめすよりも大きく、強いです。蜘蛛は、めすがおすよりも大きい少数派に属します。めすが、おすよりも４倍も大きい種類の蜘蛛も存在するほどです。

ご存知のように、一般的に生き物のすみかは、暑さや寒さ、外敵やあらゆる害から守られる為に作られます。しかし蜘蛛はそのすみかを、害を与え、そこを誤って訪れてしまった生き物を食べる為に作られます。この為、最も安心できないすみかとは、蜘蛛の家なのです。めすの蜘蛛は、交尾をした後でそのつがいであるおすをも食べてしまいます。その家は、他の生き物どころか、同じ蜘蛛の、おすにとっても安心できないところなのです。

このように、クルアーンで用いられている女性形、文法上の女性形ですら、１つの奇跡を明らかにしています。クルアーンは、ある章では宇宙に言及し、また他の章では海底について触れています。ある章では蜜蜂について述べ、またある章では蚊について言及しています。そして何百もの、何千ものテーマにおいて、それぞれ奇跡を示してきました。そして今でも示し続けています。これほど多様な分野においてこれほど多くの解説を行なっているクルアーンは、一箇所ですら誤りを犯してはいません。これは、私達に、クルアーンを啓示されたのが全世界を創造されたアッラーである、という主張がどれほど正しいものであるかを証明するものです。

親愛なるムスリムの皆様。「親友達」の、アラビア語は「エヴィリヤー」です。これは、「親友」を意味する「ヴェリ」の複数形です。ここで取り上げた章では、私達に、アッラーを忘れアッラー以外のものを友とすることに対する警告が発せられています。アッラー以外のものに庇護を求めようとすることは、めすの蜘蛛の家に庇護を求めようとすることのようで、滅亡へつながるのです。めすの蜘蛛は、自らに最も親しく接近してくるおすの蜘蛛ですら、無情にも殺してしまいます。めすの蜘蛛に例えられているアッラー以外の友は、そこに庇護を求め、信頼を寄せてくるものを滅亡へと導くのです。

その創造主がアッラーである、人間として、アッラー以外に庇護を求める対象を要求することは、その避難先が何であれ、それは理性にかなったことではないのです。アッラーこそが素晴らしい友であり、援助者なのです。